



ええもんの竜

大場賀輝

絵  
柳麻衣子



京の都で作られたその門は、船に乗せられ、瀬戸内の海を運ばれて尾道にやってきた。

福善寺の入り口に立てられたそれは、さすがは都でつくられたものだど、誰もが納得する立派なものだった。このお寺の和尚も、この門をたいへん気に入っていた。とくに、梁はりと天井の間によこたわる竜の彫刻は、威風堂々として、今にも飛び出して空をかけのぼって行きそうだ。和尚は、暇さえあればこの竜をながめている。

そんなある日の夜、和尚が暗くなってもまだ門の前に立ってその竜を眺めていると、急にどこからともなく、

「いったい、いつまで見ているのだ」

という声がきこえた。和尚は何処から聞こえてくるのだろうかと思ひ、辺りを見回した

がだれもない。しかし、

「話しているのはわたしだ、目の前にいるだろう」

とつづけてまた声が出た。和尚は仰天したが、うれしくもあつた。その声は目の前の竜から発せられたものだったのだ。和尚は竜に言った。「お前の姿は見ていて飽きない。そうだ、喋れるのなら、そこから飛び出して空を駆けることもできるのではないか」

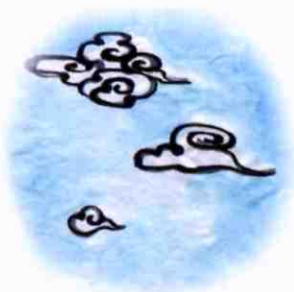
「そのていどのこと、お安い御用だ」

そう言うと竜は、梁と屋根の間からぬつと頭を出し、その長い胴をゆっくりと門の外へ運ぶと、和尚の頭上を回るように飛んでみせた。和尚はうねりながら舞う姿に見とれ、思わず感嘆のため息を漏らした。しばらくすると竜は、立派な髭を大きくゆらしながら、まわりに嵐のような風をまとい天高く昇っていった。やがてその姿は、夜空の間に溶けて見えなくなつた。

次の日の朝、和尚はいつものように井戸で顔を洗い、今日も門の竜を一目見ておこうとそこへ行った。しかし、梁と屋根の間には何もなかったのだ。竜がいたその場所は、大きな穴のようになっていてひどく寂しくなっていた。



そんな折、この国の領主様が、今大変な賑わいを見せている尾道を直接見に来られるというので、町の名主や豪商の旦那が新聞の料亭に集まって、領主様に尾道のどこを案内しようかという相談をとりおこなっていた。領主様はなかなか忙しく、案内できる寺は一つだけということだ。そして、延々と続いたその相談では、領主様が来られるのだからやはり門がしっかりしたところを案内しようということになった。この時代、門を構えることが許されるのは、由緒のある家などだけであったのだ。



そうして数あるお寺の中から最後に残ったのが持光寺と福善寺であった。持光寺にはその時、かたいもんと呼ばれる珍しい石造りの門の上に、世にも見事な堂が建てられていた。その堂は、日の光をうけてよく光るかわらを持っており、尾道に住む人だけでなく、尾道の港に立ち寄る船の船頭や水夫たちにも、よく見える港の目印として親しまれていたのだ。話し合いは白熱し、最後にはそこまで行って本物を見て決めようということになった。

しかし、福善寺まで来た一同はがっかりしてしまふ。最近うわさになっていた、京の都で作られたという立派な門には、肝心の竜がいなくなっていた。門の脇にいた和尚に話を聞いてみると、なんと竜はつい昨日でかけてしまったという。確かにそのつくりは立派なもので扉や欄間の透かし彫りも見事だが、どうも梁と屋根の間がぼっかりと開きすぎていて間抜けに見えてしまふ。領主様を案内するお寺は、その場で持光寺に決まってしまうた

のだった。

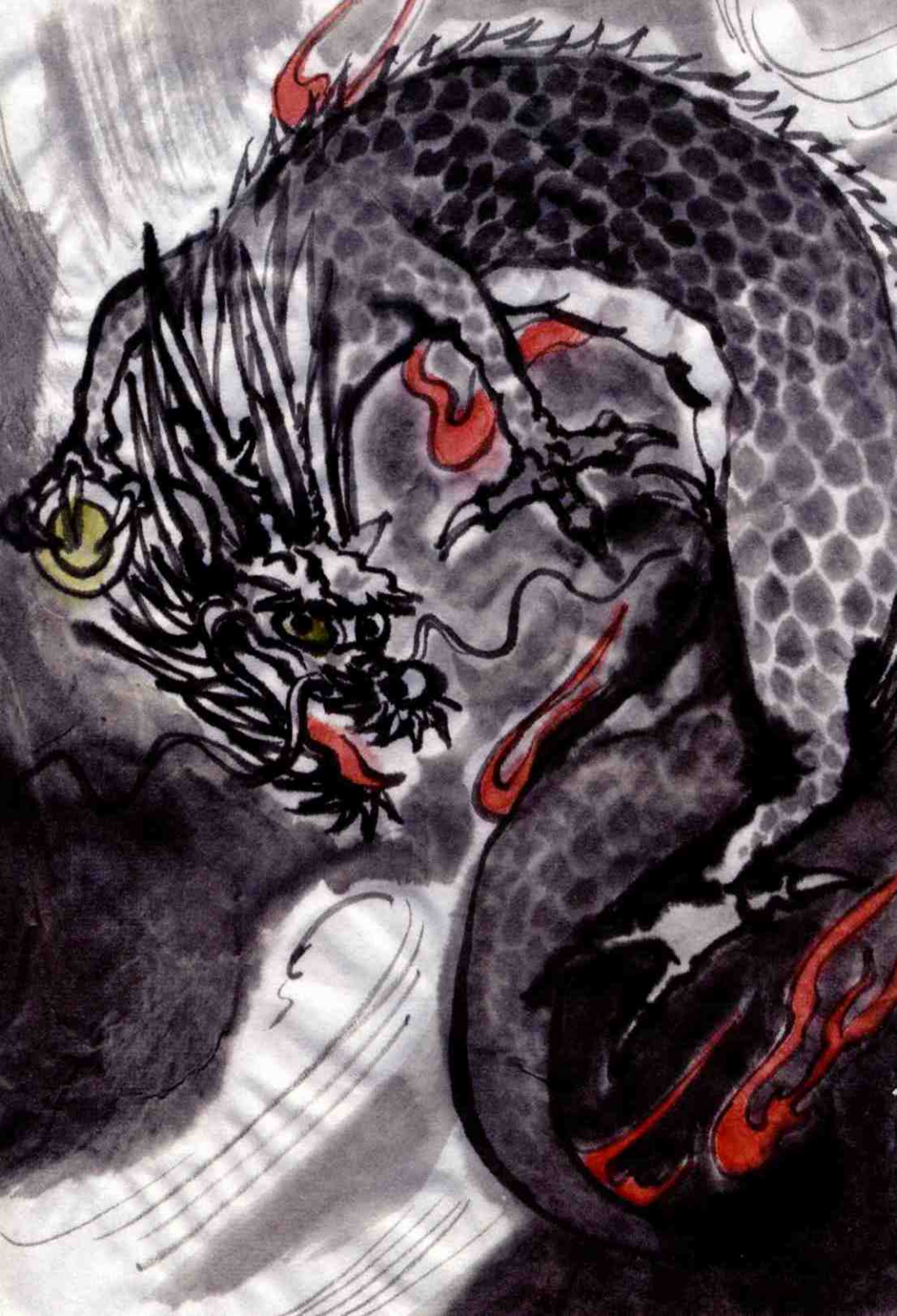
和尚はぞろぞろと引き上げていくこの町の顔役たちを見ながら呆然としてしまった。一体あの竜は今どうしているのだろうか。はたしてここに戻ってきてくれるのだろうか。

その日の夜中、あたりにはものすごい風が吹き荒れていた。どの家の住人も戸をかたく閉め、だれも外にでるものはいなかった。

しかし、福善寺の和尚は違った。和尚は、この大風はきつとあの竜が起こしているに違いないと思ひ、急いで門のところまで出ていった。すると案の定、その門の上を、あの竜が悠々と飛んでいたのだ。竜は和尚に気付くと、身体を宙に浮かせたままゆっくりと和尚に向き合った。和尚は、満面の笑みで今までどこへいったのかと聞いた。

「天からこの寺の様子を見ていたのだ」

竜はそう答えると、ついでに和尚を落ち込ませたかたきをこらしめておいたという。



「かたき？ かたきとはだれのことだ？ 私が落ち込んでいたのは単にお前がいなくなつて、この門がとても寂しくなつてしまつたからだが」

和尚がそう言うと、竜は目を見開いて驚き、あつげにとられたという様子を見せた。

「どうしたのだ」

「いやいや、何でもないぞ」

竜はそう答えると早々に門の中にはいり、梁と屋根の間に元通りおさまつた。

次の日嵐の夜が明けると、持光寺のかたいもんの上にあつたお堂は、大風のおかげですっかり壊れはてており、そのあとには、頑丈な石造りの門だけが残つていたという。

